

---

# 優しい腕を

sakura

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
優しい腕を

【コード】  
N6857Y

【作者名】  
s a k u r a

【あらすじ】  
ツイッターで流行りのオジプラスネタです。こんなおじさんだっ  
たらいいな！ みたいな妄想です。

最初はただの口やかましいだけのおっさんだと思った。

「……ねえ、おじさん？」

そう言っつて身を乗り出した少女に、男は顔を上げる。

中年も過ぎた男は、年齢に反して恰幅が良い。

「おじさん、じゃなくて名前と呼べと何度も言っつてるだろう」

軽く視線を上にあげて彼は言った。

名前と呼べと言われても、それが少女には気恥ずかしい。

そもそも、名前を呼ぶにしても、「さん付け」をすると良い顔をされない。

「だつて」

不満げな声を漏らした彼女に、新聞に視線を落としていた男はコーヒーカップに手を伸ばした。

少しだけぬるくなっている。

「……わたし、コーヒー温め直してくるね」

そう告げると、少女は自分の父親と同じほどの年齢の男のカップを手にして立ち上がりかけた。

「そのままでもいい」

「でも、おじさん、ぬるいのは嫌いでしょう？」

気を遣った様子で首を傾げた少女に、男は長い腕を伸ばす。

大きな手。

ごつごつしたその手に少女は戸惑う。

カップを手にしたままで、その場に立ち尽くしている彼女には、

男の内心は読み切れない。

あたりまえだ。

人生経験の量が違いすぎる。

どうしていいのかわからない彼女は、視線を落としてからしゅんとうなだれた。

それほど口数は多くない寡黙な男は伸ばした腕で少女の腰を抱き寄せた。

ふわりとただようのは石けんの香りに混じる甘い香り。

「ここにいろ」

命じるような強さで男が告げた。

「……おじさ」

呼びかけた少女の唇に、男は人差し指を押しつけて封じ込める。

「名前で呼べと言っただろう」

「でも」

「でも、じゃない」

そう言ってから、男は少女のこめかみに音を立てて口づけると、その耳元にささやき声を吹きかける。

低く、男に名前を呼ばれて、少女が硬直する。

数秒遅れて耳まで真っ赤にした彼女に、男は満足げに笑うと再び視線を新聞の紙面に落とした。

「……俺は、君よりもずっと先に死ぬ。だから、ここにいてくれ」

新聞を読む男はそう告げて、少女を抱きしめる腕に力を込めた。

彼女はそれを感じて、男の胸に寄りかかったまま目を閉じる。

それは、同年代の男性ではあり得ない安心感だ。守られている。

その安心感に、彼女は浅い眠りに意識を任せた。

(後書き)

読んでいただいております。\*・\*・\*  
(\*)  
(\*)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6857y/>

---

優しい腕を

2011年11月20日19時46分発行